

ドラクロアの畫談

黒田清輝氏談

(一)

ドラクロアに付ては黒田氏本誌の爲め嘗て口述せらるゝ所ありしが、其畫論も亦頗る趣味あるものなりとて、頃日復た特にその概要を口譯せられたれば茲に其筆記を載す。

△凡て自分の居る所か又行つた所の場所の性質に似合つた様な製作をする様にするがよい。例へば田舎に行つた時には成る可く農業に係したものを描け。さういふ様に自然によつて與へらるゝ所の感覺又は自分の周囲のものによつて與へられた感覺を利用するといふことに力めるが大變に利益だ。

△ミケランジュの畫を見ると、餘り解剖などをよく知つて居るが爲に、筋肉の凹凸を描きすぎ、却つて地圖の様に見えるといふ傾がある様だ。ゼリコーといふ人もメヂユウズの難船の圖では、此ミケランジュと同じ様な謬りが少しは見える様だ。若し此人にして壽命が長かつたら、或は自分の謬りを撓めることが出来たかも知れない。斯う云ふことにぬかりの無いのはポール・ヴェローズといふ人だ。此人の畫は誠に物が大きく見て有つて、局部々々の明暗濃淡といふ様なものが非常に調子よく出来て居る。側に寄つて見ると陰から明るい所へ向つての界目の調子などが殆んど分らぬ位である。が離れて見ると其區別が判然するやうに出来て居る、誠に色の調子をとるといふことの正しいものだ。之は畫面の上で遠くや近くに在る所の物體凡てに十分注意が行き届いて居るからだ。

△ヴェロネーズといふ人のかきこなし方は實に簡單であつて、正しいと言ふ様な加減が、希臘の古代の彫刻物に現はれて居る所の感じと似て居る。ムリロといふ人も此ヴェロネーズとならべて稱す可き位の人である。リュヴァンスといふ人は或る部分の描法が餘り達者過ぎた様な所がある。時としては暗い地の色の中に大變明るい人物を置いたりして氣味の悪い感を與へる。ヴェロネーズの描いた人物などは明暗の調子が誠によく出来て居るが爲に、宛がら其周圍を回ることが出来る様に浮いて見える。

△人がよく畫を見るのに彫刻物を見るのと同じ様な道理をあてはめることがある、然し之は大層な間違だ。畫では彫刻の様に一の物體を何處から何處迄確に實物と違ひのない様に拵らへるといふことはない。畫の方では吾々の眼に映じた如く描くまでの事であるから一の物體を描いて其物の輪廓が端から端迄はつきり描てなければならぬかの様に言ふのは間違だ。其輪廓は或は全く消滅して了つたり又は非常にはつきりしたりして、人間の眼に見えるのだが、夫は人物が在る所の場所によつて其後方の色の調子との釣合の都合で變化が有るのだ。

△下繪を拵らへるとき、最初に思ひついた儘を描いて、夫によつて一の大きいなるものゝ製作に着手して見ると、大變人物の釣合彼是の誤謬を發見するところがある。夫は小さい下繪で見た時は大した間違は無様でも其れを大きく直して見ると、釣合上頭を大きくしたり小さくしたりしなければならぬと出来て来るものだ。例へばフェチアスの製作した浮彫はバルテノンの高い所に在るのを下から見上げる様な理屈に出来て居るのだから、皆な頭が少しく大きくなつて居る。之はわざと此釣合の間違が出来て居るんで下から見て高く上がつて居る其高さに對して誠に正しい釣合に見える様に拵へてあるのだ。夫で此の不釣合が英吉利の倫敦に持つて來てある現物で見た時に

は低い處に在つても左程に目立つて頭が大きい様にも見えないが、世間で販賣して居る小さく拵らへた模本で見ると、今の釣合の違へてある點が能く知れる。是れだから之とは反對だが小さい下繪の内には別に目立たず氣付かないものでも大きく直すとは大變間違つて居るものになる事が有る。

『美術新報』二十七 明治三十六年六月二十日